

## Dr. I. Wadsö



Ingemar Wadsö博士は、1972年第8会熱測定討論会につづいて二度目の来日であり、親しい方も多いが、私は1976年博士のもとで研究したこともあるのでここに簡単に御紹介しよう。

博士は1930年生まれで1962年スウェーデンのルンド大学で学位を得られ、それ以来ずっと同大学で研究を続けられ、現在はスナー教授と共に化学センター、熱化学研究室の教授である。教授は生物熱測定の世界的な権威の一人で100篇を越す論文と数篇のすぐれた総説で知られている。教授のひきいる生物熱化学グループの現在の研究テーマは、1. 熱量計の開発、2. 熱量測定による分析方法の発展、3. 生化学系の熱力学的研究で、研究室では8台のドロップ型と3台のフロー型熱量計が終日運転されている。装置の開発は教授のもっとも得意とされるところで、現在LKB社から市販されているパッチ型、フロー型、ドロップ型の熱量計はいづれも教授が試作されたもの

で、現在も構造の簡単な使いやすいフロー型、マルチチャンネルのドロップ型等が開発されている。

教授は生物熱測定の国際的な発展のため年に数回は国外での学会、会議等に出席され、また1972年以来生物化学、生物物理、化学の三つの国際連合組織にまたがる生物熱力学合同委員会の議長としてこの分野の国際協力体制の確立に努力されている。

家庭では美しいアンネマリー夫人の良き夫、ローシュ、セシーリアのやさしい父親であり、すすんで家のインテリアを作られるという一面をもっておられる。  
(藤田暉通)

## Dr. R. C. Woledge



英国の生んだ20世紀の生理学の巨人、A.V.Hill(1886-1977)の名著“Trails and Trials in Physiology”(1965年出版)の前半は彼自身と彼の周辺で行われた研究のbibliographyである。そのおびただしい業績リストの1960年代にR.C.Woledgeの名を見出すことができる。すなわち、Woledge博士はHillの最後の弟子である。優秀な数学者でもあり、工学的センスにたけていた師の影響は濃く、数理に明るい面と実験生理の着実な技術で、ここ10年以上にわたって筋収縮のエネルギー論的解析を進めてきた。Hillの現象論的解析の後をうけて、熱力学的うらづけを行った兄弟子ともいえるD.R.Wilkie教授とともにenergy balance(筋収縮による発熱量+仕事量=筋細胞内の化学的变化による全enthalpy生成量)の確立を目指している。この研究と並行して、筋タンパク質のin vitroのmicrocalorimetryを数年前から始め、筋収縮のエネルギー変換を理解する上で重要な知見を着実にえて国際的な評価は高い。筋収縮

のすべり説のA.F.Huxley教授の弟子R.M.Simmonsとともに、伝統あるUniversity College London生理学教室の次代をになうホープである。同Collegeの仏文学の前教授を父とする典型的な英国中流家庭ではぐまれた保守性と新しいものを批判的にとり入れてゆくセンスのよさは抜群で、3年間を共に過した筆者にとって最も印象的であった。

毎日の食事、日曜日のディナー、パーティの料理のほとんどすべてを彼が準備するのは英国内外の生理学者の間では有名である。午後6時30分になると研究室から自宅に直行し、夕食をつくってJulia夫人、3才のお嬢さんとともにそれを楽しむ42才のSenior Lecturerである。  
(児玉孝雄)